

伊能忠敬研究

季刊 史料と伊能図

一九九八年 夏季 第一六号



伊能忠敬研究会

目 次

(表紙写真解説) 目 次

卷頭エッセイ

伊能忠敬についての覚書

とてもいい企画展でした

座談会

江戸博「伊能忠敬展」とNHK「堂々日本史」をめぐって

トピックス1

「伊能忠敬展」に関するアンケート

地域史料

愛媛県温泉郡中島町の町史資料より

史料紹介 九

伊能家文書紹介 九

●桑原隆朝

●苗代川

●芳名録のこと

研究ノート

歴史のなかの伊能忠敬 二

●「緯度」と「経度」の探求

エッセイ

忠敬さんは歩測がお嫌い 一

トピックス2

都立中央図書館蔵「伊能小図」の発見から展示へ 渡辺 一郎

江戸博「伊能忠敬展」併催 忠敬歩測練習の道歩測大会成績

ニュース速報・編集後記

(題字は忠敬の筆跡)

学習院大学所蔵の中図と同じような九州測量完了前の既存中図の組み合わせ図が宮城県図書館にも所蔵されている。仙台藩伊達家の旧蔵品である。彩色の明るい写本で、学習院図と同じように中図でありながら領主名も記入されている。

蝦夷地、奥州北部、同南部、東海・東山道(東)、同(西)、畿内、中国沿海の七部構成であつたらしいが、蝦夷地と奥州北部は欠本となつてゐる(戊申戦争の際にでも持ち出されたのであるうか)。

本図は畿内図のうち大和の一部であるが、实物は橙色が強くたいへん明るい感じである。山景の描き方は簡単で、イタリアの中図の山景とよく似ている。領主名、地名の記入には○○知行所、○○領、○○村と書くところを、知行所、領、村などの文字を省略して——で済ませている。地図合印はもちろん手書きである。方位線はやや太い。描画全体は特に丁寧ということではない。いろいろ考え方合わせると、本図は仙台藩で実用上の必要があつて急いで写した図ではないかという感じがしてならない。

また、手本とした原図は学習院中図、イタリア中図と共に思われる。もしかしたら、学習院中図が原本かもしない。仙台藩の藩政史料のなかから、本図入手経過のようなものが出でてくればおもしろいと考えている。

(渡辺)

伊能忠敬についての覚書

児玉 幸多

伊能忠敬がなくなつて一八〇年にあたるということで諸種の催しが行われた。私が勤めていたことのある東京都江戸東京博物館でも四月二一日から六月二一日まで「伊能忠敬展」が開催された。多くの人の関心を集め、企画展としては珍しく十万人の入館者があつたという。たまたま行つた日にも、館内には沢山の人々が忠敬の精密な地図に見入つておられた。

さて忠敬について何を知つてゐるかというと、昭和十年前後に私は鹿児島の第七高等学校造土館の教授をしていた。その時の同僚に増村宏氏が居て、忠敬の薩摩藩領の測量のことなどを調べておられた。私は間もなく東京に戻つたので、その成果は知らなかつた。

大戦が終わつてから、女子学習院（この時は学習院女子部になつていたかも知れないが）の地理の教授であつた堀米次さんに聞いたのは、堀さんは近衛師団に暮の仲間の知人が居て、時々出かけていたが、たまたま終戦後間もなく行つたときに、古い書類やら何やらを整理していく、庭に投げ出した物の中に伊能図があつたので、それを貰つてきたということであった。それが今、学習院大学図書館に収められている。

学習院には制作年代の違う中図八鋪があるが、その全部が堀さんが貰つてきたものかどうかは知らない。その後、学習院大学にも史学科が出来たが、その研究室に都立大学教授であつた保柳睦美さんにお願いして、伊能図について説明をしに来て頂いたことがある。保柳さんは私と同郷（更埴市稻荷山）で、私より年長であつたが、よく存じ上げていたので快く来て頂いたのである。

さて江戸東京博物館で出した図録「忠敬と伊能図」は伊能忠敬研究会で編集されたもので、中の伊能図の解説はほとんど同研究会の事務局長の渡辺一郎氏の執筆である。

六月一三日に、交通史研究会の例会は江戸東京博物館で行われたが、そこで同館学芸員の田中實穂さんの「伊能忠敬・測量の旅」という研究発表があった。測量出発までの準備と待遇、測量先での作業、測量日記から見た旅の様子など詳細な内容であった。

また、渡辺さんのお話により、六月一六日のNHKの「堂々日本史」を見た。忠敬の測量は幕府の中央集権制の立て直しの一環で、それに必要な全国の情報を集める目的があった、などという話があった。江戸幕府の全国的調査の一つということでもあった。

それで思い出したのが「五街道分間延絵図」のことである。これは道中奉行所の事業として寛政一二年に幕命で五街道の実地測量を行い、文化三年に完成したもので、三部作成したが、その一部は東京国立博物館に存在して、重要文化財に指定されている。これを「東京美術」で複製を作つて発売中である。私はその監修をしているが、開始が伊能図と同じ寛政一二年であることも、幕府の意図として考え合わせることが出来よう。

さて「堂々日本史」によると、忠敬の測量隊を引き受けた諸藩の準備や接待などが大変なものであつたことが示されている。実際そういう受け皿がなければ、あの大事業は進行しなかつたであろう。

忠敬の事業が改めて再認識される機会が出来たことは喜ぶべきことである。何十年か前と言つても終戦のことであるが、佐原の忠敬の旧宅を二度ほど訪れたことがある。しかし、そこへ来る人は稀であった。土地の人も、ある大学の野球選手の家はここですよと教えてくれる程度であった。伊能忠敬研究会などによつて、忠敬の事業や、また人物像が明瞭になりつつあることは慶賀すべきことであり、その御努力に敬意を表する次第である。

(こだま こうた・学習院大学名誉教授)

とてもいい企画展でした

秋山 ちえ子

一九九八年四月二一日から六月二一日まで、東京・両国の「江戸東京博物館」で開催された「伊能忠敬展」で私は久しぶりに充実した感動の時間を持つことが出来ました。

日本列島の「小図」、国内各所に残されている「伊能図」に関連するもの、イギリスの博物館が持っているものを借りてきて可能な限り集められていました。今から一八〇年も前にどうしてこのような正確な日本列島の地図が出来たかを語る測量道具の数々、測量に参加した一八人の人々の略歴、忠敬の測量日記二八冊、それと別に日常生活日記五一冊のキチンとした文字に私は胸をときつかせました。

学芸員の板谷敏弘さんからこの展覧会の企画準備に約三年かかったことをおききました時、「一年に一度はこういう企画展を開いていただきたい」と簡単に口にしてしまった私の思慮のなさに深く恥じ入りました。

高齢者の生き方があれこれと話題になっている今、伊能忠敬が五〇歳から地図作りの勉強を始め、五六歳から七二歳まで一六年間歩き続けて日本列島の地図を作りあげ、七四歳で亡くなったというこの生き方からは、沢山のことを教えられ、これ又、感動でした。

学校教育の社会科の中に「伊能忠敬展」見学の時間をとれたらいいなとも思いました。

こうしたことを探してTBSラジオで四一年間、土日を除いて午前十時から話し続けている「秋山ちえ子の談話室」で話しました。

岩崎書店から少年少女用に出版された『伊能忠敬』(定価 五六〇円+消費税)は、大人にもおすすめの本であることも加えました。

(あきやま ちえこ・評論家)

江戸博「伊能忠敬展」と NHK「堂々日本史」をめぐつて

出席者 渡辺 一郎・安藤由紀子

伊能 陽子・佐藤 嘉尚

斎藤 仁・清水 靖夫

佐久間達夫・香取 祐良

(敬称略・発言順)

伊能図の魅力

渡辺 江戸東京博物館で開催されていました「伊能忠敬展」が、六月二一日をもって無事に終了いたしました。また、NHKテレビの「堂々日本史」では忠敬に関して二回にわたって放映されましたので、その感想なども気楽にお話ししたいと思います。

まず江戸博ですが、結果をご報告しますと、入場者数は全部で一一一、三九九名でした。これはこれまで五年間に江戸博がやった企画展では、「シーボルト展」に次ぐ数字です。「シーボルト展」は六二日間で、今回は五四日ですから、実質的には同じか、こっちがちょっと勝ったぐらいでしょうね。(笑い)。それから、図録(伊能忠敬研究会編、株式会社アワ・ブランディング刊)の販売数は九、二五九冊で、最終日前日の夕方に完売しました。ですから、最終日に行くともう買えなかったという話も耳にします。

佐藤 忠敬フリークが意外にたくさんいるんですね。

佐久間 そんなふうに忠敬がいろいろな人に関心を持たれているというのは、やはり実際に日本全国を測量してまわったというのが大きい

安藤 ええ。謝る専門の係の方がいました。

渡辺 それから、私どもの主催行事であります歩測大会は、全体の参加者数は七百何十名と予想されますが、歩測調査票を出していただいた方は五〇九名でした。これをパソコンできちんと集計をしましたら、歩

測をした三区間のうち歩測名人が六名、歩測達人は一六名出ました。

伊能 江戸博の最終日はすごかったです。

あまりの混雑で展示が見えないという方がたくさんいましたし、係の方が「おさん」の手を放さないでください」と叫んでいました。

佐藤 お母さんと子供といった親子連れが大勢来っていて、二人とも目を輝かせて地図を見ているという風景が、とても印象的だったですね。

伊能 あと、ご夫婦などでもどちらかが得意になつて説明をしているという場面が多かった。そういう展覧会はめずらしいと思いました。

斎藤 そうですね。普通展覧会というのは静かに黙々と見るのですが、私も最後の週の金曜日に行つたら、声高らかに説明している人がやはりいましたね。

佐藤 忠敬フリークが意外にたくさんいるんですね。





と思う。

全国各地で、どこどこのお寺へ泊まったとか、どこどこの庄屋へ泊まったとか、そこへだれが訪ねてきたとかということがあるわけですから、みなさん身近なところの当時の村の名前が地図の上にあるわけです。そうすると、これは自分の、あるいはうちの家の内に生まれたところとか、ジイさんバアさんの出身地だとかといって、見て楽しむことができる。そこが忠敬と、江戸博を見に行つた人との結び付きの根本だと思うんですよ。

伊能 このあいだも、平戸の松浦史料博物館の学芸員の方から、いまは使われていない地名で分からなかつたのが、伊能図に出ていたので感激したというお手紙を頂いたんです。

清水 伊能図というのは全国版ですから、全國どこの人でも、立ち止まってじっと見ている。

佐久間 やはり地図というのは情報量が多いですから、文章よりも多くのことを教えてくれるんですね。

渡辺 みんながあれだけ地図に関心があるというのは、嬉しい反面、正直を言って少し驚きもありました。

伊能 古文書を見る人も他の展示会にくらべてすごく多かったんですよ。安藤 キャプションを、わりと具体的に書いていたのがよかったです。もっと詳しくてもよかったです。

反省点としまして、二箇所まちがいがあつ

たんです。本当は間五郎兵衛の書簡なのに、全然別人の名前が書いてあったとかですね。内覧会とは別に、間違いを確認するためだけの会というのを開いていれば、ああいう大きな間違いは防げたのではないかと思います。

清水 それはものすごく必要なことですね。

多面性がある忠敬像

香取 「堂々日本史」は二回の構成になつていて、一回目は伊能図に焦点をあて、二回目はシーボルトということでしたので、二つをいつしょくたにするのではなく、分けて論議する必要があるようと思います。

清水 一回目に關して言えば、放送のあと、面白かったよということをだいぶいろんな人たちから言わされました、大方の評判は大変良かつたですね。啓蒙的だったし、もう一つは意外性ですよね。

伊能図の測量の裏にあんなことあったの、とみなさんおっしゃるんですけど、実は私もよく知らないわけです。

渡辺 そのところは非常にだいじな問題だと思う。番組では、書上げによつて江戸幕府が情報収集していたという話になつてゐる。しかし、それは確かなことはいえないんです。

安藤 このあいだ世田谷伊能家文書を見直していましたら、書上げを何村分かまとめて、伊豆から江戸の天文方へ飛脚で送つたという覚書が出てきたんです。忠敬さんがついていかなかつた伊豆測量だからということなのか、あるいは文化一〇年の三月に天文方が丸焼けになつたために、書上げも焼けてしまつたということなのかなよく分からない。

渡辺 忠敬死じやなくて、天文方へ送つたんですか。

でもね、天文方にきちんと提出していたんだとしたら、あの忠敬さんが控えをとらないはずはないんだから、何かもっと組織立って測量日記的に整理をしたものが残っているはずなんですね。

安藤 それがまた幕府の中枢までいっていたかどうかというのも、非常に問題ですよね。

渡辺 書上げを出させるといつても、出すほうは御巡見のときと同じに出すと言っているんだから、前と同じものをもらつたってしようがないわけで、全然意味がないですよね。

安藤 巡見使のときや、それとは別に寛政六、七年など、ふだんからたくさん出させていたわけですけど、番組では、「それまでは出させたものを点検する機会がなかつたけれど、今度は伊能さんが実際歩くんだから、前みたいな加減なものは出せないと、だから価値が全然違うんだ」というふうになつていたんですね。

佐久間 私は全国から書上げの資料をいろいろもらつてあるけれども、これによつてすごく簡単なものもあつて、あれで国情を知ろうなんていう意図はなかつたと思うんです。

「堂々日本史」は、今までの伊能忠敬像とは違う見方をしようとしたんだろうと思うんですが、それには、もつと資料に基づいたきちんとした根拠が必要だつたろうという気がします。

佐藤 いろいろと問題は複雑ですが、伊能忠敬という人物に対する様々な解釈というのはいま出始めたばかりですし、一人の人物に対してもいろいろな解釈ができるというのは、それだけ忠敬が大きな人物だったということだと思います。

私などは立場上、いま静かにやって来つたある伊能忠敬ブームが、もっと本格的に、地に足がついたものになつてくれればいいという考え方なのですから、とりあえずNHKがとりあげてくれたこと自

体を非常におれしく思います。

だからいろいろな角度からいろいろな解釈を、みなさんいろいろ言ってくださいといいたい。そのほうが人物として多面性があつて奥の深い人ということになりますから。例えば「四人の妻たち」という角の話などもどんどん出てきてもらいたい。

齊藤 「四人の妻」という話は、誤解を招くことがあるんですよ。なんで四人まで持てるんですかと聞かれるわけです。

佐藤 つまり、イスラムのように一夫多妻だと思われるんですね。佐久間 忠敬は奥さんみんな早死にされた。ミチだつて四十代でしょ。妻に四十代で亡くなられるというのは非常に不幸なことだと思いまますよ。私も母が四十代に亡くなつたからよく分かる。そういうことがまず根底にあつて、結果的に忠敬には四人の妻がいたというのは、知つておいてほしいところですね。

今まで伊能忠敬という名前だけが知られていて、どういう人々のかが分からなかつたのが、今回「堂々日本史」にとりあげられたといふのは、佐原市にとつても、伊能一族にとつても、非常に良かつたと思う。

香取 佐原とか伊能家のみならず、日本のためにいいことですよね。全員 いいことです(笑い)。

伊能 たくさんの方が面白くご覧になつたというのは確かみたいですね。主人も学校へ行つたら、見たよ、良かったよって、先生方に言われたといつていました。ただ、事情をいろいろと知つてゐる研究会のメンバーから見ると、ああじゃない、こうじゃないと、言いたいことはいっぱいありますよね。

いずれにしても、展覧会にしろテレビにしろ、みなさんに関心を持つてもらうのには、いいきっかけだったかなと思います。

「伊能忠敬展」に関するアンケート

(敬称略・50音順)

板谷 敏弘 (江戸東京博物館)

今回この展覧会の担当をいたしました。展示の構成や、展示資料の選択、資料の解説などについては、研究会の調査研究の成果なしではとても考えられなかつたもので深く敬意を表し感謝を申し上げます。

関連事業に際しましては、大勢の方の参加を見、成功だったと思います。

ひとつだけ残念だったのは、パネルディスカッションが時間切れで、十分討議できなかつたことです。一般の方もおおぜいいたので、もうすこし事前打ち合わせを尽くし、的を絞ればよかつたと思いました。

伊能 洋 (洋画家・伊能家)

最初に江戸博の会場に入った時に、さまざまな感慨が去来しましたが、何よりも母に見せたら、どんなに喜んだことかと思いました。

圧倒的に多かった声は「来館者がこんなに熱心に、いつまでもケースの

前を動かない展覧会は見たことがない」というものでした。

また、展示が大変分かりやすく、今まで何となく持っていた知識が整理出来たという声も多く、「忠敬と伊能図」の編集が優れていたことが立証されました。

地方からは、「同規模の『忠敬展』を何故、大阪・名古屋・福岡でやらないのか。東京だけというのはあまりにも残念、是非実現させて欲しい」との声もありました。忠研としても一考の要有りと 思います。(すぐにと

いうことではなく)

今後の問題は、一石を投じた後の波紋の持続ということで、打上花火に終わらせないために忠研の地道な確とした運営が望まれます。

岩城 元 (朝日新聞社・伊能忠敬事務局)

「伊能ウオーグ」のコース下見で各地の市町村役場を回っているが、その多くで「伊能忠敬が最近ちょっとしたブームになってますね」「NHKで伊能忠敬をやっていましたね」という声を聞かされる。江戸東京博物館だけで伊能忠敬展が終わるのはあまりにも惜しい。伊能ウオーグに合わせてそのミニ版を各地でやれればなあと思っている。

加藤 剛 (俳優)

フロアに一步踏み入れたときの印象はまるで美術館のように美しい——アーティスティックインプレッションというべきものでした。本来の目的に機能するものとしての地図は、人の夢の形をして限りなく美しく、心を魅了するのです。やはり、人は夢のために歩く生きものなのだ、という思いで会場を後にしました。

木谷 道宣 (日本歩け歩け協会専務理事)

伊能忠敬展万才!!

小さな身体に不屈の闘志、思い込んだら命ガケとつきすすまれた渡辺一郎さんと伊能忠敬研究会のみなさんの熱意が江戸博について伊能忠敬を持ちこみ、十一万人の人々に、そしてテレビ、新聞等で一億人の国民に「忠敬」先生をしっかりと刻みつけられたことに心から感動、感服いたしております。

——歩測達人・木谷道宣拝

おつかれさまでした。第一プロジェクト完了、大成功だと思います。

吉賀 伸雄 (劇団俳優座代表取締役)

佐久間 達夫（元伊能忠敬記念館館長）

伊能忠敬展によって、一枚の伊能図が自分の出生地や現住所と密接にかかわっていることや、たくさんの宝を内蔵していることを大勢の方に認識していただけたことは、忠敬に関係した一人として喜びである。

又、伊能忠敬という名だけではなく、人間について、遺書・遺品・図録などを通して、少しでも知つていただけたら幸いです。

伊能忠敬展を開催するため裏方として努力された皆様に敬意を表します。

田中 実穂（江戸東京博物館）

「伊能忠敬という『歴史上の偉人』を、どのようにしたら肉体を伴った存在として示すことができるかな……」企画展の準備を進めながら、始終そんなことを思つていました。

伊能忠敬といえば小学校の教科書にも出てくる。きれいな地図は、日本史の教材に欠かさず載つている。けれど、この世に存在していたという実感はいまひとつ持てない。なぜ、どのように地図を作ったのか。あんな細かい地図を作った忠敬は、どういうお人柄なのか。その人間くささを表すのに、どんな資料が使えるのか。どうやらこの企画展は、忠敬に対する公開質問状＆回答の場であったようです。

自筆の日記や手紙を主な手がかりとしたので、もちろん決定的なことはいえませんが、想像するに「厳しくて頑固な職人肌のおじいさん」「身内にいると少し大変」「やることをやれば認めてくれる」（日記を見て）「とにかく几帳面」などなど。現役引退後、一七年間も地図作りをやっていたその最大の理由は、外交問題でも幕府の政策でもなく、この性格にあるとつくづく思い知られました。でも、一八〇年もの昔の人から、「人の生きかた」について、考えさせられたのも確かです。特にこんな世の中では、本当に……。

最後になりましたが、この企画展の開催にあたり協力して下さった皆様へ、厚く御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

野々村 邦夫（建設省国土地理院長）

約三年間に渡る伊能プロジェクトは、期待以上の成功を納めて序盤を終えたと思います。

展覧会その他多くの催しに参画させていただいた者の一人として、渡辺事務局長を始め伊能忠敬研究会の皆様の多大な熱意と努力に対し、心から敬意と感謝の意を表します。

これまでの成功の原因を冷静に分析してみると、やはり何と言つても伊能が時代に歓迎されたことが根本にあるのではないかと思います。それに加え、埋もれていた伊能図の会期直前及び会期中の発見、主催者である朝日新聞に止まらないマスコミの高い関心、素人の思いつきのまぐれ当たり、その他多くの幸運に恵まれたことが大きいと思います。とにかくこれまでのところ、伊能プロジェクトはついています。

物事がうまくいくかどうかは、運次第だと思います。このプロジェクトは、関係者の熱意と努力によってこれまでのところうまくいったと言うよりも、関係者の熱意と努力が大きかったため、幸運が逃げ難かったと言う方が適切かと思います。今後ともこのツキを逃さないためには、熱意と努力を持続させるとともに、これを包囲する人の輪を一層大きく、強固にすることが戦略的に重要であると思います。

渡辺 一郎（伊能忠敬研究会事務局長）

伊能図中心の「忠敬展」に少し心配していたが、さすが本物の迫力で大変な好評を博しあどろいている。

「忠敬展」がらみで伊能忠敬の名前がマスコミを通じて広く知られたことは、本当に……。

愛媛県温泉郡中島町の町史資料より

伊藤 栄子

資料 その一

赤印 愚和村御改

坂部貞兵衛殿

附添

三井金助

柴山伝左衛門殿

三好十次兵衛

栗井村

幸右衛門

其外庄屋中

青印 青木勝次郎殿
稻生周藏殿

附添

東 寛治

上愚和村 伝右衛門
浅井才兵衛

小浜村

千之允

其外庄屋中

小浜村

千之允

愛媛県の中島町は、松山市の北西の方向、瀬戸内海上に浮かぶ七つの島と二つの無人島（忽那諸島）を合わせて、現在は瀬戸内海国立公園に指定されている。江戸時代には一村一島の島々もあったが、明治以降は町村制実施で統合され、さらに昭和に入って、村は町制により上記の島々を編入して、今の中島町となっている。

文化五年（一八〇八）八月第六次測量の途次、伊能忠敬一行は中島地方にやってきた。稻生秀藏ら弟子三名、幕府の下役四名その他若党、竿取、小者など、総勢十六名であった。八月一日には三津浜から興居島へ渡り、それより二神をはじめ各島々を調査した。しかし一行の測量が、すべてすんなり運んだわけではなかった。

当時このあたりの島々は、大洲藩領と松山藩領が入りこんでおり、二子島については、松山藩領二神村と大洲藩領怒和村アラハシマチとが、所属をめぐり争っていた。呼称の上でも十一村を占める主島の中島を、松山藩領は風早島と呼び、大洲藩領は忽那島と呼んでいた。紛争のもとは古くからあった。その上安永九年（一七八〇）以後、大洲藩領のうち粟井、小浜と大浦の半分が幕府領となり、関係はいっそう複雑になつていた。

八月七日朝、測量隊一行は津和地島を出立し、三手に分かれて測量することになり、そのうちの一手が怒和村へ渡った。

當時このあたりの島々は、大洲藩領と松山藩領が入りこんでおり、二子島については、松山藩領二神村と大洲藩領怒和村アラハシマチとが、所属をめぐり争っていた。呼称の上でも十一村を占める主島の中島を、松山藩領は風早島と呼び、大洲藩領は忽那島と呼んでいた。紛争のもとは古くからあった。その上安永九年（一七八〇）以後、大洲藩領のうち粟井、小浜と大浦の半分が幕府領となり、関係はいっそう複雑になつていた。

八月七日朝、測量隊一行は津和地島を出立し、三手に分かれて測量することになり、そのうちの一手が怒和村へ渡った。

其外前小しま、いもこ島（芋子島）之類都而小島之分一切無渡海、無測量遠測ニ可致間、其旨心得候様ニ被仰聞、其後御城下御泊之節、貞兵衛殿へ島方絵図面指出候時分、又々寛治より為急御遠測ニ而御済せ被下候様申置、依之無相違御遠測ニ相成也（*この二子島は、大きい方の島を「下二子島」、小さい方の島を「上二子島」と呼んでいる。）

**の箇所は、小文字で書き入れてある。

測量隊は八月七日に津和地島を出立し、その日のうちに怒和島へ入った。右に示した資料によると、大洲藩領怒和村の内の二子島は、先年から松山領の二神と領地争いになっていた。先頃、鷺が巣をかけたとき、松山領二神から番人を付けておき、捕えて松山へ差し出した。その時も問題はなかったから、自分たちの島であると主張したが、一方怒和村の方は、いやこちらは別に鷺の必要がなかったから、捕えなかつたまでのことで、松山からの御頼みであれば、捕えて差し出す約束をしていた、と申し立てて、双方とも譲らなかつた。しかしこの時はどちらの所領ともはつきりしないので、怒和村図へは、加藤遠江守領分怒和村の内二子島、そして松山領二神村の分と双方で、縄張りの島を取り替えて記していた。したがつて此度は御測量ではなく、遠測で御済ませ願いたいと、附添の東 寛治から申し出があり、その通り島には入らず、遠測ということになった。

（冒頭にある「論所」というのは、江戸時代に山論や境界争いの対象になつた土地のことである。広く論所（論処）といつても、山論は山出入ともいって、山林の帰属と利用権をめぐる争いであり、この中には境目の争いも含まれていたという。）

伊能測量隊が全国を測量したとき、各所で山論の問題に遭遇したことが、資料からも散見できる。全国的にも数多い問題であったが、行く先々でこれに關つては、測量は進まない。忠敬先生はさらりと上手にこの問題を避けて通られたものと思う。双方の御大名の御捌きでさえ決着のつかないものを、われわれ天文方の身分で、どうして口を出すことができようかと答えていた。まことに名答であった。では實際には、双方の大名が身をのりだして争つたのであろうか。人も住んでいない小さな島のことで問題が大きくなれば、藩と藩の争いになる。これが幕府の耳にでも入れば、面倒なことになるのは、目にみえていたから、両藩とも表立つて争つたとは考えられない。そこで双方縄張りの島を取替えて書き載せ、公儀へ差し出すという案を、打ち出したのである。一応公儀への届けは終り、一件は落着したかにみえたが、住民の気持ちは収まらなかつたのであろう。村民もその事は充分承知のうえで、一縷の望みをもつて、忠敬先生に相談をもちかけたのではないだろうか。そうであるのなら、何とも迷惑な話である。

今回は、忠敬先生は紛争を避けてうまく事を治められていたが、いつもこの様に対処されたわけではなかつた。忽那諸島の測量を終えて再度四国に上陸し、桑村郡壬生川村の測量をおこなつたときは、たまたま同村の新田と高田村新田で境川付近の境界紛争中であり、大庄屋が無境界として測量をしてほしいと忠敬に願いでたが、これは拒否されたということである。そのため測量中にかぎり、川の中に杭木を立てて、今後の村境の証拠としない事を条件に、測量がおこなわれていた。

忽那諸島は海にかこまれた島々であり、そのために、一部では遠測で済ませていた。しかし陸地の中での境界争いは、当事者の間の意識がまことに熾烈であり、根が深いことを感じさせる。



輯製二十万分一図（部分）

資料 その一

たから、人々は鰯を求めて集ってきた。他領の村が二神村へ入漁料を
拝つてまでも、この辺りで鰯漁をしたと史実にある。こうした経済的
事情もからみ合って、争いの原因は一様ではなかつた。ともかくも測
量隊は論所をやんわり避けて、二子島、殿島、前小島などの小島はす
べて、遠測ですませた。

現在、この島々を含めて作成した地図は（忽那島測量図）、中島町役場が所蔵保管しているという。伊能忠敬のこの測量図は、今みても出色的の出来ばえであったといわれる。

青印	伊能勘解由殿
青木勝次郎殿	植田文助殿
坂部貞兵衛殿	柴山伝左衛門殿
同村	坂部初御宿
無須喜庄村屋村上市郎宅 (記入なし)	伊能初御宿
其外庄屋中	浅井才兵衛
三好十次兵衛	東 實治
三井金助	附添
其外庄屋中	附添

瀬戸内海は魚類の宝庫といわれる。このあたりの島々は無人であつても、漁場の基地としての価値は充分にあつた。ことに一神島の付近は、江戸初期から鰯漁の適地であり、江戸時代も中期以降になると、干鰯の需要はのび、村人の収入源になつていた。干鰯は乾燥肥料として即効性もあり、下肥に比して運搬も便利で、農業生産を非常に高め

青木勝次郎殿、瀬元よりとの島（殿島）御見込之節、寛治より申述候にハ、只今御見込之との島と申ハ、兼而申上置候通元禄年中從公義伊予国絵図面、今治、松山、大洲、宇和島之四家江被仰付摸写仕立被指出候画面ニも、大洲領須喜村之内との島と御座候

義ニ御座候 然所當春下改之砌より、松山領長師村入相之由申立候へとも、とのしまに限り脇村掛り合無御座、無須喜島持ニ相違無御座段申述候処、其訳合御帳へ被相記、其上ニ而被仰候ハ、松山方ニもあの方の島と申、則絵図杯も差出候との御答へなり

右之通之訳合ゆえ、公義之御絵図面ニハ何れの持分と御書入有之候哉相知不申候

右の資料は、怒和村御改めのあと、伊能隊が無須喜村（明治以後は睦月村）へ入り測量したときのものである。前文と同じく、村御改めのあとがきに書き添えられた一文である。

八月十日、この日青木勝次郎が殿島を見分したとき、またもや東寛治から説明があつた。それによると、この殿島という島は、かねて申し上げている通り、公儀の伊予国絵図面として差し出したときも、大洲領無須喜村殿島と書いてある。その後寛文年中の島々絵図面も、同様にして差し出していた。ところがこの春の下改めのときより、殿島は松山領長師村の入合の島である（入合とは二人以上の旗本、大名による分割支配をいう）と申し上げ、その訳を記してある。

このように松山の方も自分の領分として、絵図面を差し出したとの答えであつた。そのようなわけで、公儀の御絵図面には、殿島がどちらの持分と書かれていたのか、全くわからないと記されているが、これもおかしな話である。一体この絵図面には、どこの領分と書き込まれていたのであろうか。怒和村の御改めのように、両方の領主の名が書かれていたのだろうか。もちろん測量隊や村方が決められることではないが、興味あるところである。

領であつた。ここでは干鰯の生産はもちろんのこと、その他の俵物請負高も多く割り当てられていていた（俵物とは煎海鼠、干鮑、鱠等の三品をいう）。これらは現在でも、高級中華料理には欠かせない材料である。俵物は元禄十年（一六九七）頃から、清国向けの重要な輸出品であった。この集荷には長崎の俵物元役所があたり、伊予の各浦、無須喜村はじめ忽那諸島の村々にも、請負高が割り当てられた。ただ割り当てが過大であり、そのうえ買い入れ価格が安かつたため、各村ともその対策に苦慮していた。

こうした状況のもとでの測量隊の入境であった。天文方の接待は実に大変で、海岸の道造り、宿の修理や昼食のための小屋がけなどがあつたし、また中島の烟里村では、海岸小廻り用や轍を立てたり、繩連び、小送り等の人夫役を、のべ四五三人も出していた。その他に賄料、宿料などがあり、諸入費は風早郡で出すことになつていて、郡で不足した分が夫々の村に割り当てられ、高割りで村民の負担となつたことが、資料に詳しく記されている。瀬戸内の小さな島々の歴史からも、伊能測量の一端を担つたことが、町史の資料から伝わってくる。

今回の資料と第十号掲載の『地域資料』は本会々員の菅 哲彦氏に御提供いただきました。厚く御礼申し上げます。

参考資料

『中島町々誌』

『愛媛県の地名』平凡社

『愛媛県史』（近世）上下

『愛媛県の散歩道』山川出版

『肥料の来た道帰る道』高橋英一著、研成社

この無須喜島は一島で一村、忽那諸島の一島で、江戸時代は大洲藩

伊能家文書紹介九

その二

桑原隆朝

安藤 由紀子

なんでも鑑定団

さて、伊能家にはまったくその史料がないのに、桑原隆朝というキー・パーソンのことを書かなくては、と思っていた矢先、昨年九月放送の東京テレビ「なんでも鑑定団」で、桑原という方が、藏の中から見付かった『解体新書』を持って出演されたという話を聞いた。本物で五冊全巻揃い、御先祖の書き込みがあり、かなりの値がついたという。

大槻玄沢は仙台藩医に取り立てられて江戸詰めになり、「堺の外の藩医」として杉田玄白宅に入りし、寛政二年から『解体新書』の改訂を始めていた。ノブさんの兄弟、三代目桑原隆朝(如則)は大槻玄沢と極めて親しく、同じ仙台藩医。桑原如則が『解体新書』を持っていたことはほぼ確実である。すると、この方は桑原隆朝の子孫かもしない。さつそくテレビ東京に電話して制作会社を教えてもらい連絡してみた。これがなんと世にも忙しい方々で、担当者がなかなかつかまらない。あるいは簡単なことでは相手の住所を教えてくれないためかも知れないと思い、雑誌『伊能忠敬研究』にそえて嘆願書^(イチナ)を書いて送った。効果をきめん、桑原さんの電話番号が分かった。

桑原夫人のお話によれば、番組に申し込まれた御主人はその後急逝され、当時は、御子息が出演されたとか。まだ御主人の遺品に手をつける余裕もないほど取り込み中のご様子であった。御主人は時々仙台

に行かれたが、特別なお話はなさらなかつた由、私はすっかり氣落ちてしまつた。そのうち整理がついて何か分かつたら知らせていただくお約束なのだが、あまり期待できないかも知れない。

初代桑原隆朝(如章)——ノブさんの祖父

初代桑原隆朝は、不思議な運命の人である。例の真葛さんの『むかしばなし』によれば、「桑原のじじ様は何人の胤なるやしれず」。昔、一人の男が木曽路を江戸に向かって、六つばかりの男の子を連れて旅していたが、風邪で五、六日の内に死んでしまつた。村人は仕方なく亡骸を近くに葬り、子供は寺に預けた。二年程たつて、仙台藩医橋隆庵(四百石、伊達宗村侍医)がその寺に泊り、給仕に出たその子が気に入り『給わり候え』というわけで仙台に連れて帰つた。読書が大好きで風呂桶に隠れて書を読むほどだったので、医学を学ばせたところ、大変な上達ぶりであった。これが後の如章(ノブさんの祖父)である。宗村公から橋に門弟の医師を一人差し出すようにとの話があつた時、如章が推薦されたので、彼は橋家を終生実家として遇した。

『仙台人名大辞書』にも「生國詳ならず」とあるが、『伊達世臣家譜』によれば、桑原五郎太夫親福という人が武藏国忍城主阿部家に仕えていて、のち浪人、その子親斯をへて、その子如章が医を学んで伊達家に仕え、宗村の代に奉養となつた、とあるから、浪人の子である親斯さんが、真葛さんの話に出てくる行き倒れの男にちがいない。この初代如章から四代までの諱を桑原隆朝という(四百石)。

如章は博学で、五百巻の抄書を残し、新井白石と佐久間洞巖の往復書簡、『新佐手簡』を編集した。夫人ヤヨ子は『宇津保物語』の研究者であった。真葛さんによれば、桑原家は行儀のやかましい家で、と

くに「ばば様」はかんしゃく持ちで嫌いな事が多く、笑い狂うこと、仇名をつけること、など面白そうな事は大嫌い、「私子供の時分遊びに行きても、そうはせぬ、こうもせぬものと仰せられ、さてさて気の詰まるばば様とおぼえたりし」と回想している。系図が示す通り、夫妻には一女一男があり、娘が工藤平助の妻で、真葛さんの母である。

二代目桑原隆朝一ノブさんの父

史料一 『伊達世臣家譜』九十七

桑原隆朝純曾為侍医、寛政五年六月會桂山公病命治療、嘗以多病許乘輿於邸内、六年正月為奉薬免入直且命信證夫人診脈、七年十二月療公病、有驗賞賜羽織一領及白銀二十枚、八年六月從公駕至仙台、九年正月免奉薬且命紹山公観心夫人及諸公子診脈

(七代重村夫人近衛氏)
(九代伊達周宗)

(斎村夫人鷹司氏)

(八代伊達齊村)

ノブさんの父は、八代斎村・同夫人、九代周宗、七代重村夫人ほか諸公子を診察し御褒美をもらったこと、病気がちなので宿直を免じられ、上屋敷内で輿に乗ってよいとされていたことなど、藩から厚遇を受けていたことが分かる。四人も桑原隆朝がいて紛らわしいので、以後この名は、ノブさんの父のみに使うことにする。

桑原隆朝に関する史料はこの七行だけである。隆朝もノブさんも忠敬宛に手紙を書いたことは確実なのに、一通も残されていない。不思議なことだ。あとは真葛さんの『むかしばなし』に頼るしかない。

桑原家と工藤家

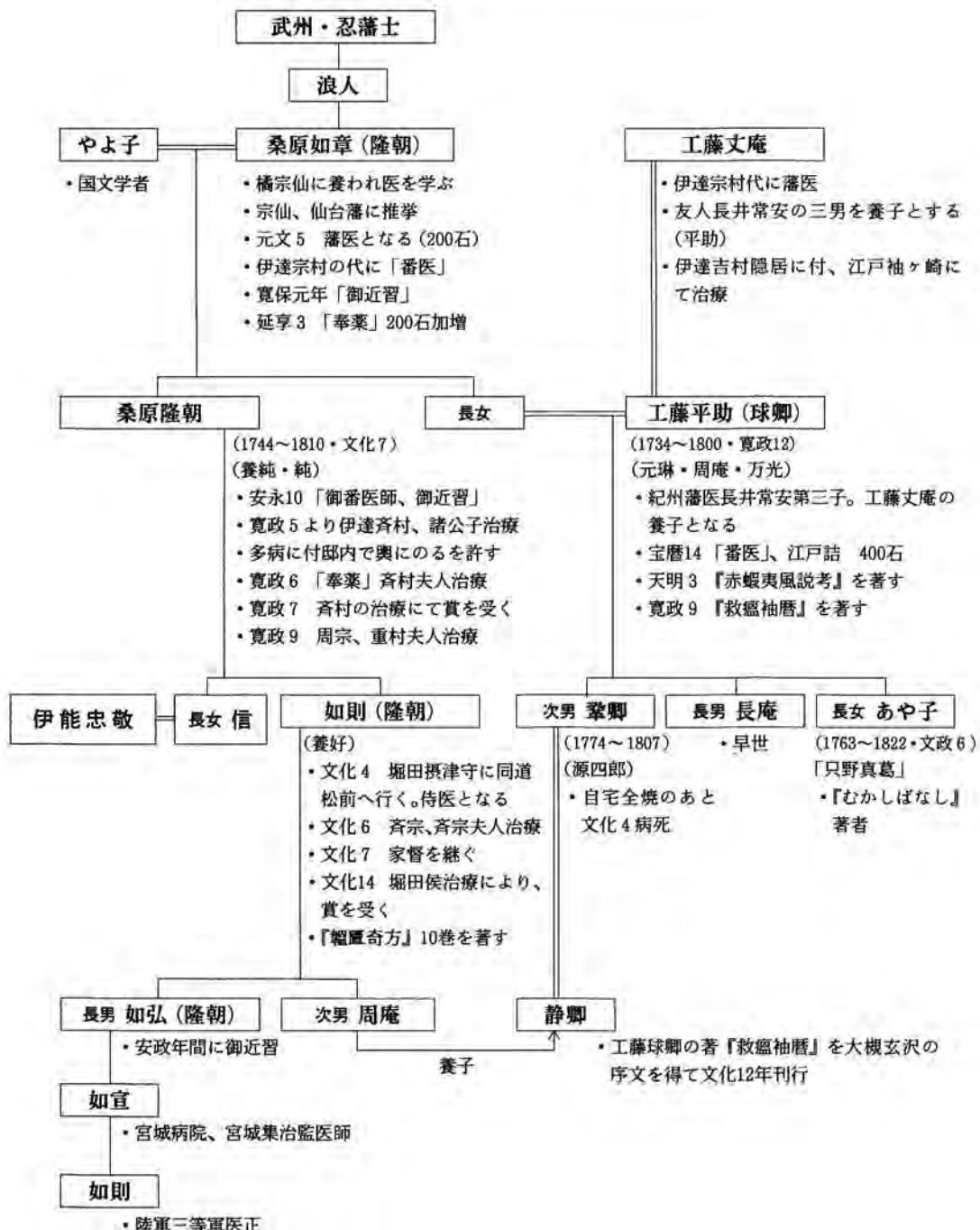
次頁の系図で明らかに、真葛さんの実家工藤家は類焼で丸焼けになり、間もなくただ一人残った跡継ぎの源四郎も文化四年に病死、工藤家はとどめを刺された。母方から隆朝の孫周庵が入って跡を継ぎ工藤静卿と名乗った。盲目の人だつたと書かれている。

伊達藩士只野家に嫁しても子のない真葛さんは気性の激しい人であったが、実家の没落を歎きししながら見守ることしか出来なかつた。如則（隆朝の長男）は、煙の中から助け出した諸道具家財を、家内の人の見ている前で道具屋に売払い、「金五拾両となしたるは無惨のことなりし。（中略）書物は養子方へ譲りにして渡したりしをも引き出して売代^{カシロ}なせしとは聞きしが、（中略）さる人のこの地の本屋にて、父の判のすわりし本を見当りしとて、哀れはかなき代や、あれ程名高き人の持たれし書の、いく程もなく散りゆくは、いかなる人か後に立ちしと歎き語りしことありし。他人の目にだにも歎かわしくみゆるを、正しき子の身として、いかで怨みをふくまざらめや」

彼女の悲しみは同情に値するが、事実は少し違うようだ。『仙台市史』によれば、工藤平助には『救癌袖暦』という医書（初編・二編）があり、四〇年にわたる彼の治療の蓄積の成果を記して、家塾の晚功堂に備え、子弟に授けていた。後にこの本をノブさんの兄弟桑原如則が重校し、大概玄沢の序文を文化十二年に得て、養子に入った如則の実子工藤静卿が刊行した。内容は蘭方を加味した漢方だったらしい。林子平は長崎で筆写した『医薬方剤』（蘭方）を工藤平助に贈り、これが利用されているからである。

『市史』は、「家塾の秘書を公刊した桑原如則と工藤静卿の学的良心は、嘆賞すべきものである。」と書いている。

伊能・桑原・工藤家 家系図 (関係者のみ)



桑原隆朝のさめた目録

工藤平助と桑原隆朝は義兄弟になるが、これほど正反対の気質の二人も珍しいだろう。

史料二 『むかしばなし』

只野真葛著 東洋文庫

(前略) 父様と叔父様は、各々得手の分野はちがつておられました
が、凡人でない心の持ち主でもありました。こんな例があります。妹
のおテルが言うには、叔父様の話を聞く度に「心もしめり引入るよう
にて」次のような話をなさったそうです。

「この世の中の果てはどうなるものだか。私が出入りしない大名は
ない程だが、どこの若殿を見ても、これが成人したらどんな馬鹿にな
るかと思う子ばかり。大納言様（将軍世継ぎ）はどんな人かと旗本衆
に聞いてみれば、御幼少のときは、豆蟹をつぶすのがお好きで、毎日
毎日大納言様御用とて、沢山取ってきておそばに撒き散らし御相手の
子と一つずつ押し潰すこと、それがすぎて九つ十ぐらいの時から鶏が
お好きでいくらでも上がる。それも棒を持って追回して追いつめてぶ
ち殺すのがお好き。お慰みにて、お縁の下にはいくらも腰抜けになつ
た鶏がひこひこしてかがんでいるということだ。そんな不仁の人が公
方様になられたら、どんな世になるか分からぬ」と。

父様は死んでもそんな気のつまるふさいだ話などはされず、お話を
きけば心ものびのびとなつたものです。

「蝦夷地を開けば、おのずから仙台は真ん中の国になるから、のち
のちは栄えた国になるだろう。日本の都は暑い所から寒い所へ移つて
きた。はじめは筑紫より大和・山城と移り後鎌倉・江戸へ栄え移り、

この後はさしずめ仙台だろう。これは疑いないことだ。世の中とい
うものは行き詰まつたからといって、もの極まればどうにか工夫のつ
くものだ。世の滅するということはありえない。だから世の末とい
うこともありえない（中略）と話されました。お心の持ちようは、空
の彼方へ晴れ晴れとぬけて行くようありました。（後略）

工藤平助の『赤蝦夷風説考』は、天明三年（一七八三年）に著され
た。ロシアの東方進出の歴史述べ、その対策として蝦夷地の開発と、
ロシアとの交易を主張し、老中田沼意次の受け入れる所となつた。短
い間だったが、工藤は時代のさきがけであった。

樂観的な工藤平助は田沼時代のバブルの花形であり、その没落まで
の破滅的な生きっぴは見事であるが、桑原隆朝の言もまことに正論
であり、寛政期を代表する「さめた合理主義者」とでも言えようか。
面白い人ではないが、さめた合理主義者として、桑原隆朝と伊能
忠敬は、気が合ったのではなかろうか。

（この項つづく）

参考文献

只野真葛『むかしばなし』東洋文庫 平凡社

菊田定郷編『仙台人名大辞書』

『伊達世臣家譜』巻之十七

仙台市史編纂委員会編『仙台市史』

辻達也編『日本の近世』第十卷 近代への胎動 中央公論社

※伊達家関係の史料については、仙台市博物館の荒井聰氏に御教
示をいただきました。

伊能家文書紹介九

その一

苗代川

伊能 陽子

九州の測量は、二度にわたって行われた上、一七年間の測量中後期であるためか、手元の資料も数が多い。今まで「つく嶋」(熊本)「平戸」(長崎)を取り上げてみたが、今回は鹿児島である。と言つても、薩摩の測量については、屋久島・種子ヶ島測量を含めて、大きなテーマであり、とても私の手に負えるものではない。次の機会、あるいはどなたかに譲るとして、何年も前から気にかかっていたこの文書を取り上げてみた。

史料一 A 五一

(世田谷伊能家文書)

二月 松元十郎兵衛

『薩摩国日置郡伊集院の苗代川へ住まわせている朝鮮人は、当主豊後守の十一代の先祖、兵庫頭義弘が文禄年間、朝鮮国へ出兵し、慶長三年に帰国の時、多くの朝鮮人を召し捕り連れ帰りまして、慶長八年から右の苗代川へ住まわせましたところ、現在では子孫が段々に栄えております。勿論、他の姓を交えたり、他所へ嫁がせたりせず、血が続いております。』

さて、初めに捕らえられた者の中に、焼き物細工をする者がおりました。子孫代々伝えてまいりまして、焼き物細工を仕事にしております。

松元十郎兵衛』

例によって、測量に先立ち、薩摩藩の担当者である松元十郎兵衛が参考資料として、測量隊に提出した書き付けである。事實を、ただ淡淡と述べているように思えるのだが、その自然さが、なぜか不思議な気がした。

申候 勿論 他之姓を不雜
子孫段々相繼罷居

他所江 嫁候儀茂 不仕
血脈相続之者 御座候
左候而 最初 捕來候
者之内 燒物細工仕者
有之 子孫代々 致伝來

右 細工越 職業致來申候
松元十郎兵衛

七年前、私は伊万里・大川内山の鍋島藩窯公園を訪れた。三三間あつ

たという大きな登り窯の跡を見た後、「陶工無縁墓」の前に立った時のショックは強かった。墓地への立札にはこう書かれてあった。

「文禄・慶長の役以後多くの朝鮮陶工たちが日本へ連れて来られ、日本の諸大名たちは競って窯業に力をいました。佐賀鍋島藩も基幹産業として特に窯業を奨励し、多くの朝鮮陶工を作陶にあたらせました。この無縁墓は、この地で一生をかけた陶工達の寄せ墓で、八八〇柱余に及ぶ無縁陶工たちの墓がピラミッド型に積み上げられています。幾百里離れた故国に再び戻ることなく息したえた陶工達の郷愁の念が今にも聞こえてきそうです。」

鍋島焼の秘法がもれることを恐れ、他国人の侵入を監視防止した所である、と表示された関所跡で聞いた説明は、何とも重く心に沈んだ。

私が以前から関心をもっていた作家村田嘉代子に、渡来陶工たちを主人公にした「龍秘御天歌」という作品がある。その中に次のような一節を見つけた。

「薩摩へいっておればよかつたに！」

そうなのか。渡来後に住み着いた土地によって、陶工たちの運命は大きく分かれたのだ。切支丹狩りも檀家制もとらなかつた薩摩藩は、苗代川に陶工たちを住まわせ、朝鮮の言葉を、文化を守らせたという。九州各地に散らばった陶工たちは、それぞれ特色ある焼き物文化を作り上げ、また四百年の歳月は、その子孫たちの生きざまも、変えて行つたのだ。

第七次測量は、文化六年八月江戸を出立、小倉城下で新年を迎える。ここから九州の測量が始まったから、薩摩の測量は文化七年、一八一〇年である。すると苗代川には、もうすでに、二百年の歴史が刻まれた頃であったのか。

島津重豪（当時の藩主、齊興の祖父）は蘭学の影響をうけて、語学、医学、天文学などに深い関心を持つ、個性豊かな殿様であったが、苗代川を訪れたこともあったという。

忠敬率いる本隊は別のコースをとつており、この地を測量したのは坂部隊であった。

測量日記より（文化七年）

八月二十二日 湿村、湊浦、出立。同所測所より始め、大里村、湯田村伊佐田村、右側にて地先ばかり。長里村枝市來を過ぎ、寺脇村内苗代川、此所朝鮮人子孫住居、迄測る。止宿李欣磧。苗代川迄二里二十四町三十三間。

なお薩摩関係の史料として、島津一門、一族、大身分の氏名を書き上げたもの、更にそれぞれの知行高を記したもの、実際の測量に関するもの、その他測量差添役などの書状、あわせて一二点ほどが手元にある。「薩摩」にひかれて、解説に挑戦することになるであろうか。

「慶長三年冬 遥かに風濤を越え 我等が開祖 この地に上陸す」
東シナ海に面した鹿児島県串木野市内に建つ石碑の文は、薩摩燒宗家十四代、沈壽官さんの筆による。秀吉が朝鮮に出兵した慶長

芳名録のこと

伊能 洋

芳名録より

大正十一年五月十日

先を以て

谷東平以恩 谷文八郎

谷文八郎

伊能の家に遺されたものの中に、五冊の古びた「芳名録」がある。これは、佐原の忠敬旧宅を見学に訪れた方の中から、特に揮毫をお願いしたもので、古くは大正六年から昭和二三年までの政治家、官吏、学者、芸術家、そして陸海軍将官など幅広い人名が並んでいて、なかなか興味深い。

当時、忠敬旧宅は史跡に指定されたものの、保護、保存費などは一銭もつかず、遺品（地図・測量器具など）はまったくプライベートなものだった。

私の祖母、忠敬から五代目に当たる孝は、毎日のように見学者が見えると、書斎の廊下に中図、大図を懸け、測量器具を並べて懇切丁寧に解説することを、八八歳で亡くなるまで、実に七〇年に及んで自らの天職としていた。

戦時中、東京から疎開して佐原の国民学校（小学校）に通っていた私も、祖母を手伝って遺品の出し入れをしたり、今ではとんでもないことだが、格好の遊び道具とばかり、量程車にまたがって廊下を走らせたりしていた。

遺品が散逸を免れ、まとまって現在の記念館に収まることが出来たのは、この祖母の功績によることが大きい。

今後、「芳名録より」と題するコーナーを設け、折にふれてそのエピソードなどを交え、ユニークな揮毫をこ紹介していく予定である。

* 「伊能忠敬研究・第九号」に紹介した箱田良助（権

本武揚の父）の誓約書に、本人・同人親に続いて親類として署名捺印している人が「谷東平」である。号は以燕、数学者。地元測量の際は、忠敬に従い測量技術を学んだという。彼の忠敬宛書簡も保存されている。

谷文八郎さんのことはわからないが、曾祖父、谷東平さんとのご縁で、佐原まで訪ねておいでになったのであろうか。大正十三年は関東大震災の翌年であり、東京帝国大学図書館に保管されていた伊能図もすでに焼失していた。

(伊能陽子)

追記

研究会会員の菅波寛さんから、藤井貞雄さんがお書きになった「谷東平に関する諸記録」（山陽和算研究会会誌より抜刷）を送っていただいた。谷氏の家系図も含まれており、日本学士院蔵「和算図書目録」の中の谷東平著作を寄贈されたのが文八郎氏であった。

哲人知
誠之於
志士勵
以思懲

字之性為

大正戊午十月

清潤書

※ 清澤栄一（一八四〇—一九三一）

銀行のほか、製紙、紡績、保険、運輸、鉄道など多くの企業設立に関与、財界の大御所として活躍。実業界引退後は社会事業と教育に尽力。（広辞苑）

※ 弘田龍太郎（一八九一—一九五二）作曲家

オペラ、歌曲、童謡まで巾広い作曲集の著書多数。「雀の学校」「叱られて」「浜千鳥」「小諸なる古城のほとり」などが知られている。長女の藤田妙子さんは現在ゆかり文化幼稚園園長（世田谷）。お訪ねして、弘田氏自筆であると確認して頂いた。佐原旧宅での感動を即興で書かれた譜面である。

弘田龍太郎曲

maestoso

(大正十四年十月廿日作)

歴史のなかの伊能忠敬 その二

「緯度」と「経度」の探求

— ガイアからコスマスへ・続 —

芳賀 啓

マリリン・サイズという現代アメリカの女性作家に、小品集 *The Island of the Map Maker's Wife* 「地図師の妻の島」(未訳)がある。タイトルとなつた短編は世界と男を経巡つた挙句、ボストン港近くに小さな古地図の店を開いた女主人公が、アムステルダムに求めるものを買い付けに行く話で、人体を地図に見立てたエロチズム溢れる結末が圧巻である。

洋の東西を問わず作成された、「人体地誌図」や「愛の地図」といふたおよそ反教育的な遺物は、ある種の人々にとっては頗るつきの堀出しどものなのだが、ここで言いたいのは別のことがらである。

くたびれたジャケットを着た退役軍人や歴史家が主流を占めるこの業界で、「非科学的」で「不正確」で、「インテリア・デコレーションにしかならない」といった誇りをうけつゝも、女主人公は三〇〇年ほど前のオランダの壁掛け地図に情熱をそそぐ、という設定自体が興味深いのである。この業界の性もまた洋の東西を問わないのか、と感慨させられるからである。

「ラファエロ前派」(P. R. B.) というのが絵画の世界で成立するなら、地図の世界で「カッシニ前派」(P. C. B.) や「伊能前派」(P. I. B.) というのがあつてもいいのではないか。業績への野心や、学術・政治といった権威への一途な従属が影をひそめ、伝奇と経験則が混交し、曖昧な線と夢見る領域の浮遊する図群は、人

間が世界や自然に対して比較的謙虚であつた時代の証書だからである。「科学的地図」や「精確な地図」の指標のひとつは、緯度と経度の記載ということになるだろう。以下その周辺を穿鑿するのは、数字に駆逐された夢見る領域の埋葬地に一文を供したいためである。

*

*

伊能忠敬の遺した業績には「伊能図」や「測量日記」のほかに、『大日本沿海実測録』(全一四巻)『北極高度測量記』『恒星表』『国郡昼夜刻』といった記録類がある。観測結果を地名と数字などで示したものであるため一般の関心も惹かず、とくに言及・研究されることなく歴史に埋もれている。しかし世界的な学術史の觀点からみれば、これらは「図」以上に貴重な「実績」なのである。

latitude を「緯度」という漢字語に対応させたのは、topography (地誌図) を「地形図」とした以上に曲訛だった(ただし前者は日本共通ターム、後者は純日本語である)。

今日、多少とも写真に関心がある向こうにとつては、「ラチチュード」とは露出寛容度つまり露光の幅を指すことは常識である。派生語の latitudinous が、思想心情の上で「偏狭でない、幅のある」という形容詞であることが示すように、語幹のラテン語 latus は broad つまり幅広いということであり、latitude も元来は「幅」や「範囲」や「領域」という意味しかなかつたのである。その「幅広さ」が、何故「緯度」を意味することになつたのか。

漢字初形初義研究の金字塔である、白川静の『字統』によれば、「緯」の旁「韋」は、□（囲郭すなわち城邑を表す）の上に左行する足型、下に右行する足型を配した会意文字で、左右に上から下までめぐる意であるという。「条坊制」という言葉を思い浮かべるまでもなく、東アジア古代都市権力に特有の南北グリッドパターン道路の「条」すなわち東西路を、郭壁の北端から南端までばやくパトロールする軍事行動を彷彿とさせる説もある（この場合、現在の「横書き」とは逆に、右から左で始まる「牛耕式」であることに注意されたい）。この章に糸偏が付されてつまりは織物の横糸となつた。「経」の正字「經」の旁が織機に縦糸を張った形であることをと思い併せると、縦糸がまず張られて、その間を杼が左右に走り横糸が通される織物の様が思い描かれ、「経緯」が「緯経」でない理由も判然とするのである。だから「経緯」とは「経緯の織りなす綾錦」というように、まずもって「縦糸と横糸」という全く一次元的構造を指表する用語なのである。ここを基盤にして「南北と東西、経線と緯線」の意が付帯し、さらには「ものごとのいきさつ、経緯」や「縦横に通曉していくて秩序だての基幹となるべきもの」といった語義の展開にも至ることとなる。実は‘Latitude’（幅）と‘緯’（横糸）の間に（そして‘longitude’と‘経’の間にも）は重大な断絶がある。それは「世界觀」の次元落差そのものである。

Longitudeとはlengthつまり長さである。一体何の長さなのか。

プトレマイオス（AD一世纪）はそのGeographike Hyphegesis『地理学』（全八巻）第六章で、テュロスのマリノスの業績にふれ、それを訂正しつつ次のように述べている。

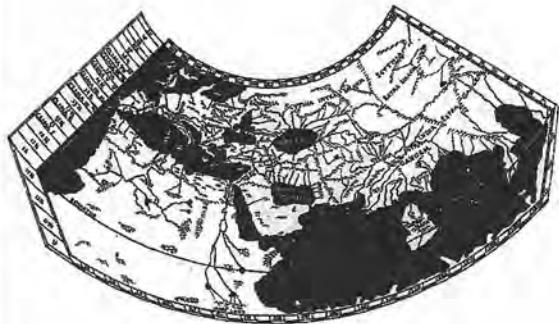
「ところで、この地球表面の東西方向の広がりを長さ（経度）、南北方向の広がりを幅（緯度）と呼ぶことは妥当であろう。なぜなら、天球上の運動の中、東西方向あるいは南北方向の広がりに対応するもの我々は同じ用語で呼んでいるし、一般に、広がりの中により大きいほうを長さと名づけており、人間の住む世界の場合、東西の広がりが南北の広がりより遥かに大きいことは、万人の齊しく認めるところだからである。」（中務哲郎訳）

引用文の前半からは、地上の位置を表す緯度・経度の座標系はプラメマイオス以前から用いられていたこと、そしてそれは天球上の位置を表す座標系と対応したものであったことが判然とする。問題は後半部分である。「人間の住む世界」とは原文では「オイクメーネ（エクメネ）」であり、「既知の世界」を指していた。そうしてこれを図形で示せば、地球面の緯度帶に並行した横長の矩形となるのである。「幅」とは「帶」でもあり、ある範囲の気候帶（クリマータ）を意味することにもなる。およそ文明の民の住むところ、暑すぎもせず、寒すぎもしない、比較的中緯度の領域だというのは古典古代の常識でもあった。そうして経度とは「既知の世界の横の広がり」であり、それは文明人の住める気候帶の南北の「幅」の広がりよりも距離的にずっと大きいから「長さ」と呼ぶのだ、というわけである。

AD三八九年の「廢仏毀釈」すなわち司教テオフィロスによるアレクサンドリア大書庫の焼亡破壊後、プトレマイオスの『地理学』はコンスタンチノープルで約一千年のまどろみを続けていたが、東ローマ帝国の危機を契機としてヴェネツィアでラテン語に訳出され、『宇宙誌』のタイトルで教皇アレクサンデル五世に献呈された。しかしその大部分（第三巻から七巻まで）はオイクメーネの約



方格図の代表例 『禹跡圖』(1137年 石刻)



ブトレマイオスの世界図
「オイクメーネ」を示したもの

八〇〇〇地点の位置に関する情報、すなわち経度と緯度を主体とするデータ集なのであった。オイクメーネにある個々の地点が、地球というよりも天球に対してもどのような位置にあるか、つまり緯度と経度の表記がその著作の基幹である所以である。たしかに伊能忠敬がブトレマイオスの『地理学』を参考することはなかつたろう。しかし約一二〇〇にのぼる観測地点の記録である『大日本沿海実測録』ほかは「伊能図」の前提であって、その逆ではない。学術上それが「図」に先立つ意義をもつものであることは、これまでたどってきた世界認識の文脈からみて明らかであろう。

私たちは、ここであらためて「測量」という行為が、宇宙空間に設定された数字からなるヴァーチャルな系へのアクセスであることに思い至るのである。地を捉えるには視点を天空に転位する、というよりも天を凝視した結果が地を把握する、と言ったほうが正確であろう。だから観測の成果にのみ則していえば、暦と地図の関係は天体観測を母とするプラザーフッドに相当するのだが、直接的には暦のほうが出自は先であって、これまたその逆ではない。

中国の伝統的宇宙観を一言で示せば、「天円地方」というものであつたことはよく知られている。簡易な観測によつても、天体が一定の円運動をなすのは万人が認めるところとならざるをえない。しかしながら大地の究極的形態に関しては話は別である。自然認識が素朴直接の感覚次元に膠着している間は、それが水平な延長をもち、広大に天下にひろがるものとしてしか認識できない。天体観が、暦と帝権の必要性に応じて発達し、また停滞したことと比較しても、さらに曖昧滞留した中国の大地に関する認識は、ついに自力ではこの素朴身体感覚

を脱することはできなかつた。だからAD八〇年頃に表された『大載礼記』のよう、「もし天が本当に円形をしていて大地が方形をしてゐるならば、天と地の接する世界の四端をぴったり覆うことができなくなつてしまふだろう」と茶化す向きもあつたのだが、このことは論理と実証として求められることなく終つてしまつた。

独自に発達した中国の天体観測術とその成果が地上の座標系確立と結びつかなかつたのは、「天円地方」という宇宙觀とともに、その独特の地図作成技法である「方格法」が永く権威とされていたからである。さらにまたジョセフ・ニーダムが言うように「中国の暦の皇帝による公布は、西洋の支配者が肖像と銘を入れて铸造貨幣を発行するに相当する権利」であり、中国の天文学は結局のところ曆学だったために、國家の権利にして義務であるという「公的」な制約を負つていたのである。つまり古代ギリシアとは対照的に、天体観測は専制國家下級官僚の排他的行為であつて、国家の「技」にして「具」という首枷をついに自ら外すことはなかつたのだ。それは言いかえれば、私的な探求、つまり私にして普遍を希求するモチーフの生れ出るような社会領域はあり得なかつたということになる。日本においても近世初期までは事情は同じであつて、むしろ天地自然の認識事情はさらに立ち遅れていた。

江戸期体制教學（朱子学）の確立者林羅山は、慶長一一（一六〇六）年六月一五日京都南蛮寺を訪ね、イエズス会の日本人イルマン（修士）である不干斎ハビアンと論争した。『排耶書』はその記録であつて、儒者の同時代的な反キリスト教論としては類のないものとされる。南蛮寺の室内に掲げられていた「円模の図」つまり「地球儀」は格好の

論争素材であつた。

イエズス会は、中国や日本などの古いアジアの国々で布教するにあたつて、ルネサンス以降長足の進歩を遂げたヨーロッパの科学・學術の成果を動員することを有効と認め、またその方法を採用していた。わが国の代表的イエズス会代弁者ハビアンは「船に乗つて東にいけば西に行き着く」と、ミッションの主張をそのまま披露したのである。しかし林は口をきわめて大地球體説をののしり否定する。「東極これ西と謂ふは不可なり。かつまた物みな上下あるの理を知らず。（略）」その感ひ、あに悲しからずや。朱子のいわゆる天半地下を繞る。彼これを知らず。（略）我天地の間を観に一物として上下あらざるはなし。彼、中をもつて下となす。何ぞ物に各々上下ある理を知るに足らんや。（略）何ぞ上ならず、下ならざること之あらん」と。

洋の東西を問わず、觀念的形式論はまことに秩序の牢固とした自衛弁証法であった。ヨーロッパでも地球説は聖書に反する異端であつて、例えばアウグスティヌスはその著『神の國』の一六章で、「太陽がわれわれのところで沈むときに昇つているような反対側の土地に住み、われわれと足が向かいあつて、アントニオ・ペラディス人については、まったく信用する根拠がない」として、古典古代の學術達成を否定し去るのである。世界の原理を物理自然よりも人倫秩序の力学として捉える性向は二〇世紀末の東アジアに健在である。そうして何よりも、当時の日本における學術水準は、宗祖中国の世界觀をなぞつて何ら痛痒を感じない程度の未熟なものだった。日本の一七世紀はこと地球認識に関する限り、ヨーロッパの五世紀に遡しかつたのである。

（この項つづく）

忠敬さんは歩測が嫌いへー

女めあかし 永野 達代

開けてはいけない扉を開けてしまった。

江戸東京博物館で開催された伊能忠敬展に出展させて戴いた「忠敬歩測の道復元図」制作過程で仕入れた情報を、誌上ではきだせとのこと。そのようなことで、つい眞面目になってしまって禁断の扉のむこうを見てしまった。

心は重いが、忠敬さんの大チヨンボ小チヨンボを、白日の下にさらさなければならぬから、深く忠敬先生を敬愛なさる方は、お読みにならぬほうがよろしいかもしだれない。

歩測図から読む往路復路

まずは渡辺忠敬さんの中チヨンボを誌上告発しなければ話は進まぬ。図1をご覧いただきたい。会員方の労作『忠敬と伊能図』は皆様お持ちのことと拝察して、以下はページナンバーのみ記すこととする。(四八・四九および一六六頁参照)。

隠宅から始まる黒線赤文字は矢印(文字の方向性)の方向へ進むと立川(豊川)を越えすぐに左折して司天台で終る。これが往路。復路は反転して、赤線黒文字が司天台から始まり、浅草寺、吾妻橋を経て隅田川の左岸を南下している。この様子は容易にご理解いただけれることと思う。

江戸博での打ち合せの席上、渡辺さんに忠敬がどう歩いたかを「ご説

明したら「ああ そうか こうこうこうだね」と、ご自分の指で地図の上をなぞっていらしたのに、何で清澄通りを北上し、吾妻橋を渡つて云々になってしまったのだろう。(四八頁)

暦局の前を通つてという記述では、なんだか忠敬さんが師が待つ暦局の前を、横目に見て素通りしているようだ。学生時代の私ではあるまいし。

渡辺さんは皆様御存知のように伊能図のこととなつたら針穴まで調べあげるお人なのになんでこうなったんだろう。

私は初会合の日、清澄庭園の涼亭で歩測図を手にした感動が忘れられない。勿論、伊能図を好きなのは皆さんと同じだが、忠敬さんみずから描かれたものは格別である。地図から何か優しい感じのものが手を伝わってきて随分エネルギーを持った方だったのだなあと思った。

忠敬歩測の道

さて誌上告発が終つたらじっくり忠敬さんの行動を追つてみよう。

朝、自宅を出ると目の前は掘割である。掘割沿いの道を行き小さな橋を二つ渡ると、右手には寺町が続いている。伊能家の日那寺である法乘院(ゑんま堂)もある。となりの陽岳寺は向井将監忠勝開基で現在も向井というお名前の表札が掛かっている。仙台堀を過ぎると左手は今の大清澄庭園、寛政七年は久世出雲守の屋敷である。小名木川、豊川を越え左折して豊川沿いに西にむかい、誘惑の多そうな両国橋、柳橋を無事すり抜けて奥州街道、今の江戸通りへ出る。鳥越神社の御手洗川である鳥越川又は新堀川を渡るとすぐ左手二〇間ほど入ったところが浅草司天台である。今この川は埋め立てられて須賀公番が建つているが、公番の両側に道路があつて妙な感じなのは江戸の地形の名残な

のである。

高橋至時のものとの勉強を終え、広小路へすると奥州街道を北上する。右手は広大な幕府御米蔵。駒形堂、風雷神門（いまの雷門のこと）。風神様がいなくなってしまった。江戸名所図絵には風雷門）仁王門（いまは宝蔵門）観音様、隨身門（いまは二天門。たしかこの門は忠敬さんがぐぐった当時のままのはずである）と歩測をする。この年、三月十八日より六〇日間浅草観世音開帳そして風雷神門が再建されている。歩測図に風雷神門が描かれているから忠敬さんは木の香も新しい門をくぐったのであろう。

大川橋（我妻橋）を渡ると細川若狭守の屋敷。そして北の方は水戸藩の広大な下屋敷である。この庭園の一部が今、隅田公園になっている。藤田東湖の正氣歌碑が建っている。

南へ戻るとまことに残念なことに、ここのこところは破損していてよくわからないが、よく観るとちょこっと東側へ入っている。ここは多田の薬師堂と思われるが、なぜここを歩測しているのかは理解できない。

い。このお宝は、江戸名所図絵に描かれているので忠敬さんが境内で歩測をしている様子を想像しながら見てみるのも面白い。

御竹蔵は言わずと知れた江戸東京博物館が建っている場所である。

はやくから米蔵になっていたそだが歩測図も御米蔵になっている。

旧安田庭園辺りはなかなか興味深いが寄り道になるので次の章にする。

a 地点から朝来た道を戻ってb地点へくると、突然右折して六軒堀をこえ御粉蔵の堀にそつて右折し c 地点で止まる。

この不審な行動は何か。a を基点として時計方向に浅草をぐるりとまわって a、b ときて c で閉じる、野々村国土地理院長が述べておられる（一〇頁）①ではなかろうか。はたしてこれで①といえるのかどうか私には判らないが。

ここから「大江戸うわさ話」という題で、集めた資料をもとにあれやこれや雑多なことを書くつもりだった。しかし魔が差したといふなんというか歩測図に記してある数字を、距離が書いてあるに決まっているのに、見ておこうという気になってしまったのである。

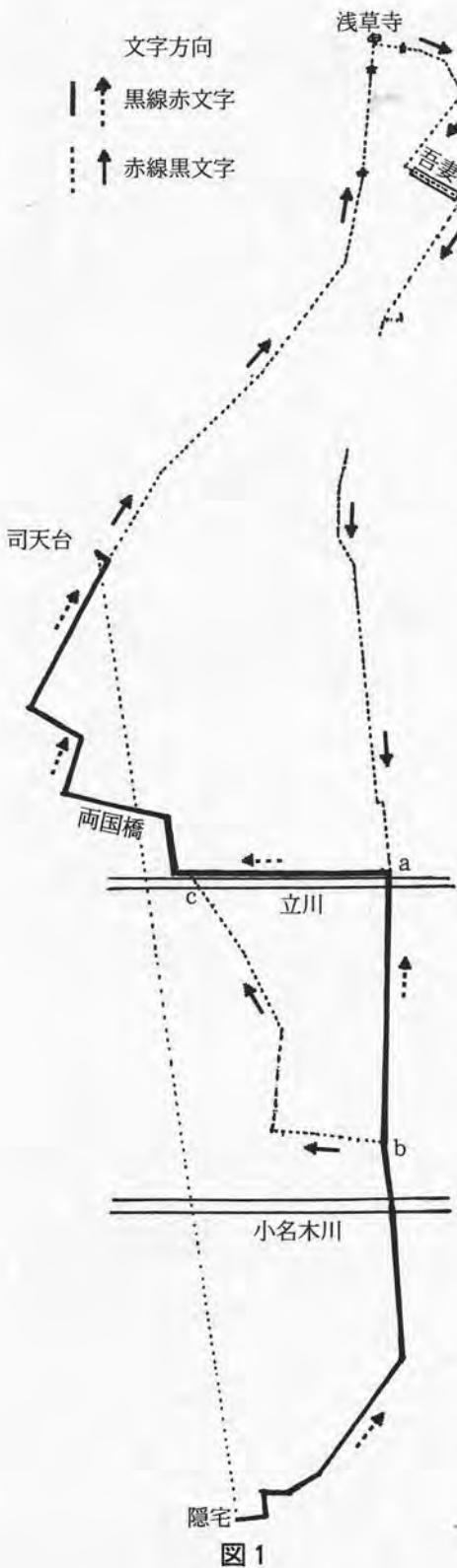


図1

扉の向こうの大チヨンボ

哀れ文盲の身としては、原稿執筆を厳命した安藤さんにおすがりして現代語訳していただいた。

伊能忠敬研究会といえども文盲率は九〇%前後と思われる所以載せておきます。一支十等分で初というのは0分だそうです。

エツ文盲はオマエだけですって。ヘヘーッ失礼いたしました。

ご丁寧な解説と方位の読み方などお送りいただいた翌日、江戸博でお会いするや「ほとんど間で終っていますねえ」「間ってあの間でいいんですね」と困惑して顔をみあわせた。



図2

開いたとびらの向こうには○間○尺○寸と整然とした数字が並んでいたはずだった。が、私の目に入ったのは雑駁な印象の図2である。皆様も読み進めないでここで図2をとくとご覧ください。理解出来た方はいらっしゃいますか。

この数字は何を表しているのだろうか。これが歩測で得られた数字を表しているとしたら、自分が知らない尺度が使われているのではないか、とても私の手に負えない。しかしここで放り出す訳にはいかない。涼亭で歩測図を手にした時に手を伝わって身体のなかに流れてきた何かを思い出していた。忠敬先生を信じなければ。うわさ話どころではない。血みどろの岡っ引き生活が始まつた。

大チヨンボの解明に挑む

まず方位を見てみると、方位を計る方向が図1の動線と一致するので行動経路は図1で正しいことがわかる。

次に思い切って数字を観察してみると、往路はすべて間で終っている。どうやら規則性がありそうである。そこで整理をしてみた。

【往路】

- ・最小単位＝間

・二回測っている。長い距離は改めている。一箇所を除き改は距離が縮んでいる。

【復路】

- ・最小単位＝三分三厘
- ・使われている単位は 間、六・六、三・三の三種類。
- ・間＝一箇所 六・六＝八箇所 三・三＝七箇所
- ・改は無い。

・目標物を描いている。

・橋の長さを測っている。

さて、これ等から導きだされることは、まず一目で解るのは往路と復路の性質がまったく違うということである。

そして理解できないのが、三・三と六・六である。これはなにか。尺や寸でないのは確かである。

三・三は一間の三分の一。六・六は一間の三分の二。つまり一間を三等分しているのではないだろうか。では、なぜ一間を三等分するのか。一間を三歩で歩くことではなかろうか。それならば往路の最小単位が間であるのも納得できるような気がする。

実際に複歩ならぬトリプル歩で歩いてみた。三歩を一とカウントしながら歩を進めるのである。結果は複歩をするのとまったく変わらない。

しかし佐久間さんは（一四二頁）忠敬の歩幅は一步六九・〇四センチという数字を出していらっしゃる。実際の三歩の長さと一間の関係をみてみると

$$69.04 \times 3 = 207.12 \text{ cm}$$
$$207.12 - 181.8 = 25.32 \text{ cm}$$

実際の歩幅よりも一五・三一センチ 一一・二一一%短く、実際の歩幅は一間三歩に対しても一三・九二%長い。困った結果である。

渡辺さんの試算では（一六六頁）一一・八%の誤差とか。

しかし他に一間を三等分にする説明が思いつかない。

そこで実際に歩測図に記されている距離をセンチに直したうえで誤差を修正し五千分の一の図を作り、私が作った五千分の一復元図の下図にあわせてみることにした。

$$69.04 \times 3 \div 181.8 = 113.92 \%$$

渡辺さんが出された一一・八%という数字があるので一三・九二%はうまく行けば下図と同じぐらいか多分大きくなるだろうと予想した。が、あに図らんやトレベ方眼紙に作った五千分の一歩測図は下図よりずっと小さいのである。一からやり直したが同じ結果である。

下図は国土地理院発行一万分の一地形図の二百%拡大＝五千分の一をベースにしている。

復元鳥瞰図はスケール・アウトしているのか。

首筋に氷を貼り付けられたようゾーッとした。もう必死である。くるつてているのは歩測図か地形図か。答えは次号へ――

大谷亮吉氏以来誤差をいわれる。私なりの原因の結論を次号に発表します。皆様も謎解きに挑んで違う結論をお聞かせください。

日経ほか各紙既報

都立中央図書館蔵「伊能小図」の発見から展示へ

渡辺 一郎

江戸東京博物館の「伊能忠敬展」をあと一週間にひかえて何となく気ぜわしい四月一五日、北海道の会員の高木崇世芝さんから電話がかってきた。「渡辺さん、江戸博に英國から伊能小図がくるそうです。が、都立中央図書館に最終版小図の本州東部と日本西南部があるのを知っていますか」「それは驚きた。すぐいってみる」。

電話を切ったときはほんとうに驚いた。この一年間に、気象庁から大図写本四三枚発見、東京国立博物館で九州第一次測量地域の大図一枚、中・小図各一枚発見と大形の伊能図発見が続いたあと、いよいよ江戸東京博の「伊能図展」が始まろうと云う矢先である。

まず、江戸博図録「忠敬と伊能図」の英國小図のキャプションを確認する。「三枚セットはこれだけ」とあり、本州東部はこれだけと書いてないでの安心する。

翌一六日、早速、都立中央図書館の特別文庫にゆき、閲覧調査の結果、間違いなく伊能小図の良質な写本と認定。責任者の森課長不在につき、係員に事情を説明するとともに、「江戸博展とのからみもあるので新聞に通告します」と念を押して帰る。

たまたま、日本経済新聞が伊能忠敬研究会の活動を記事にするため、私と佐久間達夫氏を取材中だったので、翌日電話を入れる。私は、二〇日江戸博周辺でNHK総合テレビの撮影に出演、あと江戸博内覧会、ここで板谷学芸員に耳打ちしておく。二一日、江戸博の初日を眺める。夜、日経の松本記者がきて内容を確認する。

都立中央図書館蔵「伊能小図」

予定通り一五日に都教育庁で新聞発表され、報道各社からつぎつぎに問い合わせが入ってきた。読売、毎日、朝日、産経、東京、ジャパンタイムスから追加情報を求められ、翌日朝刊の記事となった。

都立中央図書館林課長より電話。「日経に出たけれど、あらためて新聞発表したい」と意見を求められる。もちろん賛成。「日本にない」とされていた伊能小図がみつかったのであるから」とすすめる。

五月一三日、林課長が研究会に来室、新聞発表内容について打ち合わせ。五月一六日に江戸博の講演と討論の会で、私がこの小図について話をことを公表していたので、五月一四日になって明日発表すると林課長から知らせがある。この間、役所の手続きはさぞたいへんだったと思う。

都立中央図書館林課長より電話。「日経に出たけれど、あらためて新聞発表したい」と意見を求められる。もちろん賛成。「日本にない」とされていた伊能小図がみつかったのであるから」とすすめる。

五月一三日、林課長が研究会に来室、新聞発表内容について打ち合わせ。五月一六日に江戸博の講演と討論の会で、私がこの小図について話をことを公表していたので、五月一四日になって明日発表すると林課長から知らせがある。この間、役所の手続きはさぞたいへんだったと思う。

西南部の地図裏に奥書が貼付してある。

実測神州与地分図 二枚

此者阿部勢州公執政の時、天文台に
命じ写せしものの由大槻先生より

承り候俟 記し置もの也

ここにいう大槻先生は大槻如電である。地図表面に大槻氏印という
蔵書印があり、如電の蔵書印と合致するから間違いない。勢州公は阿
部伊勢守正弘で、一八四三年から一八五七年まで老中の職にあった。
天文台は天文方と同じである。一八四一年に渋川助左衛門（高橋景保
の弟・善助の後身）が九段にも天文台を設けているからどちらの天文
台に命じたかは定かではない。

大概如電は明治の洋学者で、忠敬とも親交のあった大槻玄沢の曾孫
にあたる。私はかつて、大谷亮吉の『伊能忠敬』六一〇頁の伊能小図
の所在の項に「英國海軍省に存する写本は文久年間、幕府が英國測量
艦長に与えしものにして、大槻如電の蔵するものは松平伊勢守が命じ
て謄写せしめたるものなり」という「云々」とあるのを見て、大槻如電
旧藏の伊能小図を捜したことがある。大槻如電の旧藏書はほとんど大
概文庫として静嘉堂文庫に所蔵されるので、同文庫に依頼して小図を
探していただいたが見つからなかつた。いっぽう、松平伊勢守という
大名・旗本を探してみたが、旗本に数人いるが、いずれも人物が合致
しないので調査は行き詰まっていた。

この地図の奥書にある阿部勢州が松平伊勢守なら、大谷氏の説明と
ピッタリ合致する。阿部正弘の後裔の正道氏（文京区本郷西片町）に
電話をいれ、阿部家に松平姓があつたかどうかを確かめた。無いとい
うことであった。現物はたいへん出来の良い写本である。旧藏者は大
谷氏の思い違いということであろう。

この図のことを本州中部とこれまで呼んできたが、内容的には本州
東部のほうがよいようである。今後、本州東部としたい。

描画範囲は英國の小図と同じである。英國図とちがつて淡彩である。
国名を囲む四角の枠内を朱で塗りつぶしているので、一見した感じは
神戸市立博物館の小図にちかい。（英國グリニッヂ小図は国名の枠内
は塗りつぶさない）描画はたいへん丁寧で、たとえば朱の測線は太め
で、太さが均一で筆継ぎのあとが分からぬ。國界は他の伊能図は朱
の太線であるが、本図は枠を墨で書き、中を薄紫で染める。おそらく
朱の測線との紛らわしさを避けたのである。

地図合印は、宿駅○、郡界●、寺院△、城下□、港▽、神社△、
など揃っており、英國小図にはない天測地点☆も記されている。こ
れにより小図にも☆の記入があつたことがわかる。文字はすばらし
い達筆で、山景はグレーがかつた緑である。

保存も完全である。折り目の交点に穴があいた部分もあるが全体に
傷みは少なく、美麗である。大正六年一一月三〇日に日比谷図書館に
入庫、昭和五八年一二月一九日都立中央図書館に転籍された。

私も何かの記録で日比谷図書館に伊能図があると知り、二〇年以上
前に日比谷図書館を探した記憶を思い出したが、標題が伊能図となっ
ていないので世の中に紹介される機会がなかつたものである。このよ
うな伊能図はまだまだたくさんあるとおもう。宝探しではないがチヤ
レンジして欲しいと考えている。

本州東部 縦二四三×横一六五センチ

本州東部とセットの小図で描画形式は同じであるが、制作者が異なる。文字がやや劣り、関門地区には文字のカスレがあり、九州全般に鮮明度はやや劣る。折り傷、虫少しあるが読図に支障はない。入庫は本州東部と同じである。

本図が話題になつてすぐ、江戸東京博物館と都立中央図書館の御好意により、展示変更をして六月第二週から「伊能忠敬展」に出品されたのはたいへん見事な連携プレーで、心から敬意を表したい。

化往來

Two copies of Ino maps discovered in library

Two hand-drawn copies of maps made by Ito Tadatada, the first modern cartographer to create precise maps of Japan during the Edo Period, have been discovered in the archives of the Tokyo Metropolitan Central Library, officials said Friday.

One precisely depicts central Honshu from Aomori to Osaka in color; the other shows southwest Japan from Osaka to Kyushu.

No copies of the former were believed extant in Japan; the only other known copy is being kept at a British museum.

"I was so excited because I never thought (any of these were) in Japan," said Ichiro Watanabe, an expert on Ino maps who made the discovery. "And (it was) in Tokyo's own back yard."

The two belong to a set of three maps known as "shozu (small map)." Worldwide, only six copies of the shozu were known to exist.

Ino (1745-1818) drew his maps as he wandered across Japan, focusing in particular



THE SOUTHERN KANTO AREA is depicted on a newly discovered copy of a map drawn by Edo-Period cartographer Ino Tadataka. TOSHIKI SAWAGUCHI PHOTO

江戸博「伊能忠敬展」併催

忠敬歩測練習の道歩測大会成績

伊能忠敬研究会

伊能忠敬展と併行して、(社)日本歩け歩け協会・東京都歩け歩け協会および伊能忠敬研究会の共催によって、「伊能忠敬展」会期中に四回行われた忠敬の道歩測大会は、三回も雨にたたられながら、七百名あまりの御参加をいただき、新聞・テレビ各社でも大きく取り上げられ盛会となりました。

忠敬の道の全長は、江戸博、忠敬宅跡、富岡八幡宮、両国橋、暦局跡、浅草観音、吾妻橋、江戸博を結ぶ約一〇キロ。この間に、歩測場所として忠敬宅跡、両国橋、吾妻橋の三カ所に各五〇〇メートル程度の区間を設定して歩測大会をおこないました。

参加者のうち、伊能忠敬に挑戦して歩測表を提出した方は五〇九名でした。データを精査して、左の方々に歩測名人ならびに歩測達人のタイトルを進呈しました。

歩測名人とは、三箇所のうち良い二箇所をとおして誤差が〇・五%以下(一〇〇〇メートルにつき五メートル以内)で、各箇所の誤差が一・〇%を超えない方を対象としました。ちなみに、忠敬の地図の誤差は〇・二%くらいですが、歩測だけで作ったわけではありません。今日は歩測距離が短いことを割引しても立派なものです。

歩測達人については、三箇所のうち良い二箇所をとおして誤差が一%以下(一〇〇〇メートルにつき一〇メートル以内)で、各箇所の誤差が二・〇%を超えない方を対象としました。

本大会の歩測箇所の真の値は、国土地理院の関東地方測量部・川田次長指揮の測量班により、百万分の一の精度で測定されております。また、第一回大会では雨の中で現代測量の実演をしていただきました。参加された国土地理院の技術官各位に厚く御礼申し上げます。

成績の判定は、歩測表に書かれたデータを、日本歩け歩け協会の加川主任指導員がパソコンに入力して作成した精査用データにもとづいて行いました。ありがとうございました。

大会中、歩測のやり方の説明ビデオの上映、ならびに忠敬宅跡付近の歩測場所の案内は、伊能忠敬研究会で担当しました。雨中にも拘わらず、東京近辺の多数の会員の方々に当日役員として御協力いただきました。厚く御礼申し上げます。

西村 弘一 (五月三一日)	熱田 遥 (五月三一日)
安田 達男 (五月三一日)	平井耕一郎 (五月三一日)
梶田 正子 (六月一四日)	木谷 道宣 (六月一四日)
藤岡 時彦 (六月一四日)	堀川 弘幸 (六月一四日)
小泉 重昭 (五月三一日)	

ニュース速報

●伊能忠敬研究会・ホームページ
URLは、<http://www2s.biglobe.ne.jp/~auto/inoh.html>

担当 大友正道

- 九月一二日(土)佐原の新記念館見学をかねて、伊能忠敬研究会総会を開く予定です。当日は「歩け歩け」の行事と一緒にになります。前日から佐原に宿泊を希望の方は、早目に事務局へハガキ又はFAXでお申込み下さい。先着一〇名位まで、用意できます。
- なお、当日の詳細な予定などは、追ってお知らせ致します。

- 本誌第一四号一九頁で御案内した『伊能忠敬書状』(千葉県史料近世篇文化史料二)は、助千葉県史料研究財団で入手できるそうです。

本代 二、〇六〇十送料 三四〇 合計 二、四〇〇円 です。

〒二六〇一〇〇一三 千葉市中央区中央四の一五の七

TEL ○四三一二二一五一〇〇

(高島賢治)

入会案内

「伊能忠敬研究会」は次のような活動を行っています。

- ①本会報の発行 当面年四回。
- ②例会の開催 講演会、発表会、各種史料、伊能図の展示説明会、見学旅行などの例会。
- ③その他、伊能忠敬に関連するさまざまな事業。

入会方法

- 住所、氏名、職業、関心分野、電話、ファックス番号を通信欄に記載の上、郵便振替にて年会費六千円を「郵便振替口座 〇〇一五〇・六・〇七二八六一〇 伊能忠敬研究会」あてにご送金下さい。

編集後記

*本誌の編集委員は次のとおりです。(50音順)

安藤由紀子(元国会図書館憲政資料室)・伊能陽子(伊能家)・香取禎良(前佐原市教育委員会次長)・小島一仁(佐原市史編纂委員長)・齋藤一(学習院女子短大)・佐久間達夫(元伊能忠敬研究会会長)・清水靖夫(立教高校教諭・法政大学講師)・芳賀啓(柏書房専務取締役編集長)・渡辺一郎(伊能日本図探求会代表・会社会長)

●「秋山ちえ子さんがラジオで、伊能忠敬展のことをとても褒めてくださったから、聞き逃した方のために是非一言、会誌にお書き頂けたら…」と会員の武田さんご夫妻からの電話。面識のない秋山先生にどうお願いしたらよいのか思案したが思い切ってお手紙を書いた。ヨーロッパ旅行でお疲れのことろ、快く原稿をお送り下さり、感謝感激。その後、お目にかかる折の、八一才とは思えない先生のさわやかな活力には忠敬先生も負けそう、と脱帽です。

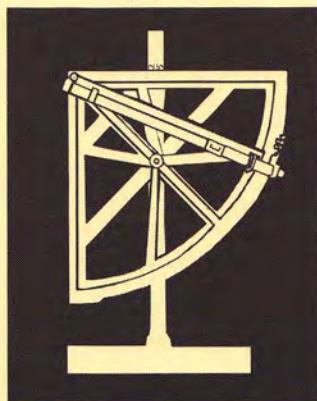
●「苗代川」の原稿をまとめた後、鹿児島行の機会を得た。一枚の古文書のお陰で、幸運にも沈壽官氏にお目にかれ、鹿児島歴史資料センターの徳永氏のお話しも伺う事が出来た。その地で触れる歴史の重み、奥深さは格別で、今更ながら私どきがと自信喪失、立ちすくみ状態である。

(伊)

THE INO TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INO'S MAP AND WRITINGS

No.16 Summer 1998



ESSAYS

A Memorandum as to INO Tadataka	KODAMA Kota 1
Very Nice Exhibition Plan	AKIYAMA Chieko 3

TABLE TALKS

About the Exhibition and the NHK TV Program	4
---	---

TOPICS 1

The Questionnaires of the Exhibition	7
--	---

LOCAL MATERIALS

A Document of Nakajima-cho, Ehime Prefecture	Ito Eiko 9
--	------------

MATERIALS

Family Documents 9	
KUWAHARA Takatomo	ANDO Yukiko 13
Naeshirogawa	INO Yoko 17
From Visitors' Registers	INO Hiroshi 19

STUDY NOTES

History and INO Tadataka 2	
Quest of Longitude and Latitude	HAGA Hiraku 21

ESSAYS

Was pacing off a week point for Mr. INO ?	NAGANO Tatsuyo 25
---	-------------------

TOPICS 2

Discovering Maps and the Exhibition	WATANABE Ichiro 29
Records of a pacing off assembly	32

OTHER NEWS

33

Edited and Published

by

THE INO TADATAKA SOCIETY